

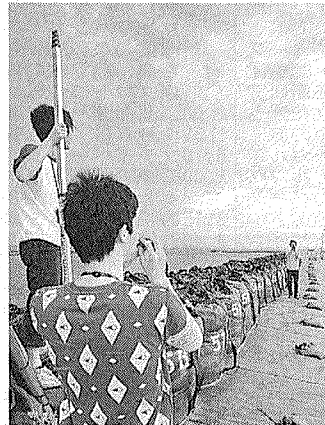
大学

東日本大震災から2年。復興は道半ばだ。早稲田大学東日本大震災復興研究拠点では、理工学系の研究者らが集まり、地元住民を巻き込みながら3つの復興プロジェクトに取り組んでいる。成果は国内にとどめず、地震や津波災害の多いアジア諸国・地域に、日本の防災や医療技術とともに広めるのが狙いだ。

□ ■ □

研究拠点は東日本大震災直後に3年間重点的に支援するプロジェクトを大学が募り、2011年5月に発足した。始まった復興プロジェクトは複合災害研究所、自然文化安全都市研究所、先端環境医工科学研究所の3つ。どれも早大の理工学術院で研究を進める。

早稲田大東日本大震災復興研究拠点



被災した堤防を正確に測量し津波の流れを数値化、破壊原因を調べる(石巻市)

知の明日を築く

防災・医療知識海外に

複合災害

研究所は、津波災害の分析から復興

合災害に強い街を研究する。中心となる教授の柴山知也(59)は、国内外もとに数値計算し、研究で知られる津波や高潮の室で再現した。

研究者だ。

この実験で「堤防を越える。柴山らは、防災機能をえた波が思わぬところに持っていたはずの堤防が渦を作り、圧力が高まっどつして津波で壊れたのか、徹底的に調べた。宮(柴山)。この検証をも

とに、津波に強い堤防の設計研究と合わせ、いざというときの地域の避難計画との連携を調べる。



早稲田大学
東日本大震災復興研究
拠点(理工学術院内)

などを軸に、地域住民のつながりを生かす都市計画だ。宮城県南三陸町を何度も訪れるうちに、伝統の「黒船祭」を復活したいという住民の希望が強いことを知り、地元の若者と話し合い、再開を目指すという。「文化、伝統、歴史が復興にどう役立つかは曖昧に映るかもしれ

災害時の救急医療のあり方を考え、船のように海の上に浮かぶ病院の必要性を訴えるのは先端環境医工科学研究所だ。救急時の人命救助は72時間以内がカギとされる。今回の震災では津波で医療機関も崩壊し、慢性的な病気の治療が中断、症状が悪化して亡くなった人も多かった。自衛隊ヘリコプターもあるが、広域災害で大勢を壊したアジア諸国・地域問題を解決する一つの方法として、招へい教授の浅野茂隆(70)と教授の中尾洋一(48)らのプロジェクトが提唱するの

自然文化安全都市研究所は、文化遺産や自然との共存から新しい都市計画と社会システムを考える。建築が専門で、アンコール遺跡の保存・修復に長年携わる教授の中川武(68)らが取り組むのは、古民家や無形文化財

ないが、人を育てることが復興につながる(中川)と強調する。

岩手県大船渡市にある元禄時代の古民家の再生にも取り組む。11月には岩手県で公開シンポジウムも開く予定だ。

現在、病院船の具体的な

電子版に関連記事

▼Web刊↓紙面運動

学ぶ 磨く 育てる

敬称略

(吉野真由美)